



「メリット神経病学」

H. Huston Merritt 編著

椿 忠雄監訳、新潟大学脳研究所神経内科訳

ここであらためて紹介するまでもなく、原著は神経内科学を専攻する人々のみならず、リハビリテーション医療等、医学関係全般に広く知られている名著である。原題名は、A Text book of Neurology で、約 20 年前出版されて以来、神経学の教科書として順次改訂されつつ、多数の人に愛読されて今日にいたっている。我が国でも約 10 年前、医学書院よりアジア版が出版され、より広範囲に読まれるようになった。当時、未だ発足してまもないリハ養生校の私達学生にも朗報であったが、語学上で私にとっては一大難問題であり、邦訳版があればと切望した一人であった。今度、最新第 5 版が出るにあたり、新潟大、椿 忠雄教授等により待望の邦訳がなされ、出版となったので紹介することにした。今回の改訂は前第 4 巻と比較して、内容的には大幅な改訂がなされている。全体の記載形式や疾患項目順序は特に変化なく

(一部順序が異なるのみ)、内容的に各疾患項目のほとんどに何らかの改訂がなされ、ある疾患に関しては全面的に書きあらためられているものがある。全体としては新疾患が約 25 程度加えられて、それに伴い一部疾患が削減され、各疾患での参考文献も最近のが収録、図や表等も全く新しく記載されたり、以前の古いものと新しいのとに変えられたりして、出来得る限り最新の知識等を記載しつつ、かつ量的には整理されて、増大しないように配慮されている。監訳者の椿教授が序でのべられている如く、神経内科学の重要性が増し普遍的知識が要請されている今日、本著の用途が再認識されている。又、リハ医療の各分野にもこの邦訳の著書は、ますます重要度が増していると思われる。

(医学書院、B 5、頁 538、¥ 9,800、1976)

(甲州中央温泉病院 藤本欽也)

「失行症」

秋元波留夫著

この本の“初版”(1935 年、金原商店)をはじめて読んだのはもう何年か前、上田敏先生が苦労して探し出されたその本の写しを貸して下さったときのことであった。印象は強烈で、私もまた「いい、いい」とふれまわったりした。だが、肝心の本は手に入れるのが不可能に近いことであったから、すすめながらもはたと困ってしまったものである。

そのとき最も心を魅かれたのは、この本の個性、力強い理論の展開、ということであった。ちょうど私自身が 1 人のゲルストマン症状群の患者に取り組んでいて、その多彩な症状の核心が実は空間関係の障害であることに気付き始めていた時であったから、秋元先生の「失行＝失認」理論がやはりゲルストマン症状群の観察体験から起っていることに不思議な嬉しさを感じたりした。

文章がまたよくて、一昔前の文語体とはこんなにこくのあるものかと思った。だがいかんせん歯ごたえがありすぎて、「当面」必要な章を読もうというような、なまけ心が先に立った。

今度の「現代語」訳を読み通してみても、ほんとうに驚いたことがある。膨大な量の文献を何と自在に生かしきっていることか！ 歴史をふりかえりつつ、諸家の理論のよって来たる所を調べ、対立理論を止揚し、「事実」を抜き出して自家例とともに自身の理論の根拠とし、その論述は、はじめの頁から最後まで、あたかも堂々と流れる大河のようである。一方で、症状のある部分を、窮地におかれた健常人の行為と対比させる柔軟さもある。

この本の核心は、失行における失認性要素の重要性の指摘である。が、これと並んで、この本の価値は、健全なすぐれた頭脳が、自分の観察と先人の見出したものを材料に、あらん限りの思考を傾けて理論を築いてゆく姿を示した点にもあると思う。

巻末に鳥居方策氏による 1932 年以降の失語・失行・失認に関する本邦文献リスト、上田敏氏による解題がある。

(東京大学出版会、299 頁、1976 年)

(東京都老人総合研究所、作業療法士 鎌倉矩子)